

## シンポジウム企画趣旨 (「リアリティの変容? - 電子メディア/アート/セラピー-」 - 2001年度学術フロンティア・シンポジウム報告)

著者	斧谷 彌守一
雑誌名	心の危機と臨床の知
巻	3
ページ	5-7
発行年	2002-02-15
URL	<a href="http://doi.org/10.14990/00002468">http://doi.org/10.14990/00002468</a>

## シンポジウム企画趣旨

司会 斧谷 彌守一

甲南大学文学部人間科学科の斧谷と申します。今日のシンポジウムの全体的な趣旨をさせていただきます。まず初めに、今回のシンポジウムの趣旨について簡単に私の方からお話しさせていただきます。このシンポジウムは、学術フロンティア推進事業の第三回シンポジウムですけれども、第一回シンポジウムが昨年の二月に「トラウマ」というテーマで、第二回のシンポジウムが今年の二月に「現代人と母性」というテーマで行われて、どちらも、心理学か、その関連のことがテーマになっていたわけですが、今日のテーマは「リアリテイの変容？」で、サブタイトルとして「電子メディア/アーノセラピー」と入れてあります。このサブタイトルの最後に一応「セラピー」とありますし、お話いただく方のお一人、名取先生は臨床心理学の先生です。それから、第二部で指定討論者として登場していただく本学の森先生も臨床心理学です。ということ、一部は臨床心理学と関係がある形になっていますが、全体としては必ずしもそうではない。実際にこの会場に先程来てみて、参加していただいている方の数が第一回、第二回に比べましてちょっと少ない、「ああ、心理との

関連がもう一つ見えにくい今回のような場合だと、やっぱりかなり減ってしまうのかな」と思いました。それはともかくとして、今日のシンポジウムは、人間の心とも関係する非常に根本的なテーマ、これから一体どうなっていくのかがよく分らない大きなテーマを扱うこととなります。「リアリテイの変容？」ということ、これにクエスチョンマークを付けていることには大きな意味があると思っています。我々の生きている世界の中に、電子メディア的なものが非常に深く食い込み始めた。その目覚しい最初の例というのが多分テレビゲームであったのではないかと思えます。テレビゲームというのは、一九七〇年代ぐらいから流行り始めました。それからしばらくすると、いろんな事件が起き始めて、そして、事件を起こした少年がテレビゲームをやっていたというような事例が出てまいりました。その当時によく言われたのが、テレビゲームなんかやっている



境目が失われてしまうのではないかと、ということでした。その後、更にパソコンというものが普及してきましたし、それよりも更にすごい勢いで、この二、三年普及してきましたのが、携帯電話ということになります。その携帯電話というの今はiモードといった形でインターネットにつながっています。今や携帯電話を使ってインターネットにつなぐということがごく当たり前になっていて、実際に普段段それをおやりになっているお若い方もこの会場にいらっしやると思います。駅とか街頭で携帯を覗き込んで、指先で次々に文字を打ち込んだり、iモードで何かを検索したりしている風景を非常によく目にするようになりました。iモードが事件に結びつくという例が最近非常に目立ちますね。最近起きる殺人事件で、その出会いの最初のきっかけが出会い系サイトだったという事件が次々に起きています。パソコンにする携帯電話にする、とにかく不特定多数の人とつながっている、あるいは情報を共有できる、そういう事態がどんどん広がっています。パソコンや携帯電話を介して不特定多数、世界中とつながっているという形で、いわば「サイバースペース」といわれる空間が今本当に広がってきたという実感がするわけです。そこで、こういう事態をどう見ていくのか、そういう事態が本当に我々が棲み着いている現実、リアリティの変容を招きつつあるのかないのか、というのが本日のシンポジウムのテーマであり、「リアリティの変容？」というところにクエスチョンマークを付けているのは、そういう意味なのです。世界のこのような変化は、とにかく人間にとっては進歩なんだという形

で、非常に楽観的に物を見る人がいます。その代表者として、例えば立花隆という人は、こういうサイバースペースのなご、あるいはデジタルのなごに対して非常に積極的で、かつ非常に楽観的な見方をなさっています。昨年出た立花隆さんの『新世紀デジタル講義』という本で、人間が情報を手に入れる場合の二つのやり方ということが言われていて、その一つのやり方が、「できるだけ濃い情報を選んで摂取することである」と。これを読書に譬えて言えば、厳選された良書を精読、熟読することになります。かつて確かに私なんかも子供時代に読書指導で学校の先生に指導されたのは、そういうことであつたかと思えます。要するに、良い本を推薦されて、それをじっくり読む、そして読書感想文を書くというようなパターンですね。ところが立花さんは、情報を得るもつ一つのやり方があると言っていて、それは、「情報を摂取する過程で、それを自分で濃縮して情報密度を上げることである」と。「自分で濃縮して情報密度を上げる」と言っても、ではそれは熟読することによってその情報密度を上げていくかといえ、そうではないんですね。そうではなくて、このやり方というのは、読書に譬えれば、拾い読みでも飛ばし読みでもよいからできるだけ多読、乱読する、分かるところだけ拾ってがまん読んでいく、ということです。だから、分らないところで立ち止まらない、引っかけつても止まっていけない、ということになります。とにかく拾い読みでもいいからどんどん飛ばし読みしていくことによって情報密度が上がっていく、と立花さんは言っている。現在、パソコン

とか携帯を通して新しい情報が溢れかえっている世の中では、その情報に日々真面目に付き合っていたらやっつけていけない、そういう場合に立花さんの言うように、とにかくそれを飛ばし読みして分かるところだけ切り取って、自分の役に立てるといふやり方は、確かに一見今の世の中をうまく泳いでいくためには非常にいいやり方なのかも知れない、という気は表面的には致しますけれども、本当にそうなんだろうかと、飛ばし読みによって上がっていく情報密度とは何なのだろうかと、という疑問を感じるんですね。今よく言われるのが、インターネットとかパソコンとか携帯とかのメディアのあり方自体がどんどん進歩していくのに対して、その中身、内容が足りない、コンテンツが不足しているということです。映画などのコンテンツをたくさんのお金を使って奪いあうという事態が今生じている。マクルーハンという人は、一九六四年に「メディアはメッセージである」ということを言っています。例えばインターネットで何らかの情報を流す場合に、このマクルーハンの「メディアはメッセージである」というテーゼを当てはめると、インターネットで流しているその情報の内容自体ではなくて、インターネットというメディアのあり方自体が重要なんだということになるんですね。このことも、本当にそうなんだろうかと、内容は重要ではないのだろうか、という疑問を感じます。今日は、シンポジウムということとまず初めに四人の方にお話しただくわけですが、それども、それぞれご専門となさる分野も違いまして、鷲田先生は哲学・倫理学、西村先生は美学、名取先生は臨床心理学です。K O

SUGI+ANDOさんは実際にアーティスト活動をなさっている方です。そういうことから、異分野同士の方にお話しただくということもあるし、それからそれぞれの「リアリティの変容？」という問題に対するスタンスのあり方はそれぞれお違いになると思っんですね。ということ、まずお話を聞きまして、第二部でそれをかき混ぜて何とか議論をしていきたいと思うんですけど、ただどちらにしろ、果たして本当に今日統一的な方向が出るかということになると、これは非常に難しいだろうと思っっています。初めに申しましたように、指定討論者も含めて臨床心理学の先生がお二方いらっしゃいますし、サブタイトルに「セラピー」と一応あるんですけど、本当にそこまでするのかどうなのか、つまり現状はこうであるという把握をした上で、ではそれに対するセラピーはどうなるのかという話まで本当にいけるのかどうなのか、あるいは今日のテーマがそもそもセラピーということに本当に直接繋がることなのかどうなのか、その辺に關しても議論の余地はあるんじゃないかなというように思っいます。ということです、まず最初に鷲田先生にお願いしたいと思います。